ミッシング

冴島岐之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ミッシング

【Ｎコード】
Ｎ９９４６Ｃ

【作者名】
冴島岐之

【あらすじ】
大切すぎたから、隣にいることが、当たり前だったから。まだ、私達の関係は壊れていない。だから。

プロローグ

君のいない未来なんて、あの頃は想像できなかったんだ。

「俺達はずっと一緒だろう？」

そんな、信頼性なんてこれっぽっちもない情報。それでも、信じたかった言葉。

俺達はずっと一緒だ。

それでも離れるしかなかったんだよ。

嫌いになりたくはなかったから。そんな自分は、自分だと認めたくないから。

「頑張って、ひとりになろうとしてるんだと思う」

いつか逃げない自分になるよ。そうして君に会いに行く。

「お前のこと、信用してるよ」

「おい、頼むから会って、電話でもいいからっ」

「じゃーな」

いつか会いに行く。それだけは約束するから、だからもう少しだけ、時間をください。

ひとりになるための時間を。

「もう、笑ってくれないんだ」

でかい身体を小さく縮こまらせて、あいつはそういった。
泣いてるかな、なんて少しの罪悪感を感じて胸が痛い。

「もし、俺のことで泣いたらさ、」

あいつがゆっくりと顔を上げるのを待った。まだ泣いてはいない。
目を見て、俺は少しだけ安堵する。

「愛してるって、いっといてくれよ」

「んなの自分でいえ、帰ってきてな」

あいつがそういって睨むのに対して、俺はただ苦笑いを浮かべる
ことしか出来なかった。

「また、連絡するよ」

ねぇ咲、俺のいない生活はどうだい。
俺は、さみしくて仕方ないよ。

＊＊＊

メイク　＊　01

気が付いたら、そこには中島の姿があった。いつだって、隣にいて笑っていた。少なくとも私は、笑顔でここにいた、そういう中島しか知らないのだ。

「あら、キサキちゃん、曲がってるわよ」

中島が私へ顔だけを向けてそういった。その視線の先をはかりかねていると、中島が左手の人差し指を二回小さく動かす。その指の先を辿って、自然と自分の胸元へ視線が落ちた。

「あ？　あぁ、ホントウだ」

制服の、ただつけるだけのリボンが、なぜか左側だけ妙に上に引きつっていた。右肩にカバンを背負い直し、リボンを直そうと試みる。ところがなぜかうまくいかず、手を放すとまたびよんと左側だけが上に引きつった。

「くそったれ、リボンのくせして」

「もう、やーねぇ。すっかり寝惚けてるんだから」

中島は隣で小さく肩をふるわせて笑う。

私はしょうがなくつけるときに乱雑にしたせいでねじれたままになっているゴム紐を直しながら、右隣を歩く中島を肘で小突いた。それでも中島は変わらずにくすくすと笑うだけだ。

社宅の家が隣同士の私と中島は、偶然にも同級生で、小学校も中

学校も一緒に通った。毎日、同じ時間に同じ道を歩いた。けれど今年入学した高校はそれぞれ違う。中島は男子校、私は女子校で、その上電車も逆方向なのだけれど、所要時間に大した違いはないためか、今でも中島は毎朝私の家へ迎えに来る。

最近では、私を起こすことまでもがすっかり中島の役目に変わった。

顔を洗って、朝ご飯を一緒に食べて、制服に着替える。それから中島に化粧をされる。今ではそれが毎朝の習慣だ。

「んもう、折角かわいくしてあげたんだから、あんまり怖い顔しないの」

「あたしに化粧しようってのが無駄なワケ。わかれ」

「やーよ。こんな素材良いのにもったいないでしょう！」

わけのわからない理屈を、中島は自信たっぷりに吐く。ほとんど毎朝、耳にタコができるほどに繰り返されてきたこの会話も、すっかり習慣の一部だ。

「じゃあ、せめてその言葉遣い止めろ」

「キサキちゃんがアタシのこと名前で呼んでくれるなら、考えてあげても良いわよ」

「は？　じゃあキサキちゃんって呼ぶのヤメろよ」

「イヤーよ。キサキちゃんってかわいいじゃない」

「……もういいや」

自分で会話をしながら、くだらないことを話しているな、と思う。けれどこれが私たちの日常で、習慣なのだ。

毎朝同じ駅へ向かう道を、同じ人間と歩いていく。それを当たり前だと思っている。けれどいつまでも続くことではないと知っている。私は隣を歩く中島へ悪態をつきつつも、その習慣に安心している自分がいることを知っている。

家から駅まで約十分の道のり。最後の曲がり角を曲がる。一番に見えるのはバスターミナルとタクシーが止まるための広い道路。その周りを囲むように歩道がある。

「キサキちゃん、今日も部活？」

「あー、うん。部活」

「終わるの何時だったかしら」

「……七時には、」

終わるんじゃないかな、そう続けようと思ったとき、駅の入り口の柱に寄りかかるようにして立って、私達の方を眺めている視線を見つけた。

「弥生だ」

「あら、ホント」

弥生とはいつもプラットホームで会う。それは特に約束をしているというのではなく、たまたま同じ時間帯に同じ車両へ乗っている、

というだけなのだ。だからこうして、駅へ入る前にその姿を見るのは珍しい。

「どしたんだろ」

「どうしたのかしらねぇ」

私の言葉に、中島はくてんと首を傾げた。

「まぁ、それならアタシは先に行くわ。またね、キサキちゃん」

そういうと中島は私の頭に軽く手をのせるようにして二回叩いた。子供扱いを思わせるようなその行動に、私は軽く睨んでみせる。けれど中島はいつものようにへらりと笑うだけだ。

「あんまり怖い顔しないでよ、もう」

「うっさい」

私はそれだけいうと、弥生がいる方へ向かって歩き出した。

「キサキちゃん」

後ろから私を呼ぶ中島の声。ぴたりと足を止めて、ゆっくり振り返った。

「またね」

にこりと笑って、中島はそういった。

「ん、またね」

私は不機嫌な表情をしたまま、短くそれだけいった。それからすぐに弥生の元へと駆け出した。

「おはよ」私は短く声をかける。

「おはよう」

眠そうな顔をした弥生から、普段よりはいくらか落ち着いた声で挨拶が返ってきた。落ち着いているというより、落ち込んでいるといった方が合っているかもしれない。

西川弥生とは高校で出会った、同じクラスで、初めて出来た友人だ。最寄り駅こそ同じだが、中学校も小学校も違う。お互いの中学へは部活の事情で何度か行ったことがあるが、顔見知りというわけでもない。けれど弥生は私のことを知っていて、初めこそ根も葉もない噂のレッテルを貼られ嫌われていたが、今では良い友人関係を築いている。

「何してんの?」

「あのさ、」

弥生は一旦口を開いて、何かをいおうとした。私はその後に続く言葉を待ったけれど、一向に弥生はしゃべろうとしなかった。躊躇うように目を泳がせて、そうして結局また口を閉じた。おかしな様子の弥生に対し、私は首を傾げる。

「あ、とさ。……あれ、咲にできるの、中島くんくらいだよね」

「あれ？」

「頭、ポンって」

「あぁ」

さっきのことか、思って改めて弥生を見た。一般女性よりは身長が高い弥生だが、それよりも私は背がある。一般的な男性と同じくらいだろう。けれど中島は幼い頃からずっと、私より背が高かった。第二成長期に入ったときですら、私は中島の背を追い越すことが出来なかった。

女子校に入学した今では、私より背の高い人間には絶対といって良いほど出会わない。強いていうなら、毎朝会う中島くらいだ。私の頭へ苦もなく手が置ける人間なんて、中島の他には早々いない。身長だけは両親に似なかった。

「え、てかそれがいおうとしてたコト？」

「あ……う、ん」

「ふーん」

様子がおかしい、そう思った。けれど弥生は俯いて口ごもってしまう。何かいいたそうにしていることは確かだったけれど、迷っているように思えた。何かいえない事情でもあるのだろうか。

「ま、いいや。早く行こ。電車、来る」

弥生が顔を上げるのを待って、改札へ足を向けた。いえるときに、いいたいときにいってくれればそれで良いのだ。

後ろから弥生がついてくるのを横目でちらりと確認してから、私は定期入れの入っているカバン横の小さなポケットへ手を突っ込んだ。

「あ、」

「何？」

「古文のヤツ、忘れた」

改札を通り過ぎながら、急にそんなことを思い出した。前回の授業で出されたプリントだ。確か、半分くらい解いたところで終わっている。

「江畑、あんなの絶対十分じゃ終わらないってわかって出してんだよ、もう……弥生、やった？」

「うん、やったよ。見る？」

「ホント？　助かるー」

「一問百円ね」

「ヤ、高いって！」

いい合って、並んでホームへ続く階段を昇りながら、笑った。電車が来ることを告げるアナウンスが聞こえる。「あ、来るかね」

「大丈夫でしょ」

そういいながらも、自然と早足になる。後四段というところで、白い機体に緑のラインが入ったいつもの電車が、スピードを緩めながら走っていくのが見えた。

「ギリじゃん」

「ホントだ」

いいながら苦笑いを浮かべて、階段近くの乗車口からはひとつ隣の車両の、一番近い乗車口へ早足で乗り込む。いつもの位置だ。弥生と一緒に乗り込んだところで、ドアは閉まった。

「結構ヤバかったね」

「うん、ちょっとびっくりした」

少しばかり息が切れていたが、それもすぐに元に戻る。伊達に運動部をしているわけではない。

「今日古文何限だっけ？」

「えーっと、確か、三限じゃなかったっけ」

「あ、水曜か」

視線が上の方を泳ぐ。中吊りの広告が視界を掠める。それから確認するように弥生へ目を合わせようとして、別の方向を向いていることに気がついた。

「どした？」

「あ、イヤ。……咲」

「ん？」

「あの人、また見てる」

そういいながら、弥生はさっき見ていた方とは逆へ首を動かした。私はゆっくり、弥生が今まで見ていた方向へ視線を動かす。私と弥生がいるところとは対極線上にあるひとつ隣の乗車口へ。そこには同じ制服で、肩を覆うほどの長い髪には綺麗にパーマをかけている、彼女が今日も立っていた。

彼女は真っ直ぐにこっちを見ていたようだが、私が何気なく視線を向けると慌てたように逸らした。

「ホントだ」

特に感動もなく、そう呟いた。それから弥生へ向かって視線を戻し、小さくため息をついた。

「別に、見たいなら見てればイイよ。害ないし」

「でもさ、なんかストーカーみたいじゃん」

「……あぁ」

「気持ち悪くないの？」

自分でも声が低くなったのがわかった。弥生は彼女を不審そうに横目で見ている。視線が落ちていく。

「ごめん」

「へ？」

電車が走る轟音がうるさい。弥生の声が聞き取れなくなった。一瞬思い出した映像がまだ意識の大部分を占めている。

「なんかいった？」

「イヤ、ちょ、目ぇ怖いって」

いわれて私は驚いてしまう。なんていまさらなことをいい出すのだろうか。

「んなことといわれても……つり目なの、今に始まったことじゃねーじゃん」

「そうじゃなくて、なんか怒ってる？」

「別に、怒ってないけど？」

弥生のいうことが理解できずに、私は小さく首を傾げた。「そっか」弥生はゆっくり視線を落とす。

「怒ってるように見えんの？」

「イヤ、違うならイイって、気にしないで」

「……ん」

わからないまま返事をした。そのまま電車の外へ目を向ける。流れて、置いていかれる景色。見たことのあるような街並み。いつも思う。電車の速さに、戻れないのだと。停車駅のない電車に乗っているんじゃないかと、思う。生きているっていうのはそういうことなんじゃないかと、考えてしまうのだ。

「咲、あのね、今日、ヒマ？」

声にはっとして、弥生へ顔を向ける。

「部活の後、ってコト？」

「そ、ヒマ？」

「まあ、予定はないけど……」

そう返事をすると、弥生は困ったように寄せた眉はそのままで、私を見上げるように顔を上げた。

「じゃ、ちょっと付き合って」

＊＊＊

メイク　＊　02

「……で？」

弥生はご飯を食べに行こう、そういった。その点では何も間違ってはいないのだ。けれど、この状態は果たしてご飯が目的だといえるのだろうか。

「ごめん、でもマジ勘弁して！　帰るとかいわないで！　藍花（アイカ）に断り続けんのだって大変なんだからね」

小声で弥生がそう呟き、私はため息をつく。

「ヤダ、帰る」

「古文見せてあげたじゃん！　後が怖いんだから、諦めて！」

「もう……」

腕を引っ張られながら、藍花たちが既に座っているテーブルへ連れていかれる。ほのかに天井は白い煙で充満している。確かにおかしいとは思った、女二人でお好み焼きなんて。バイトもしていない高校生の財布を考えたら、ファミレスが妥当だ。

席には藍花ともうひとり、純子（ジュンコ）という女子がいた。二人ともクラスメートだ。それから見覚えのある制服の男子が四人。中島が通う男子高のものだったな、と思う。よく見ないとなかなかわからないストライプ柄の深緑色をしたズボンは、この辺りでは珍しいモノだからだ。

見た限り、席順は適当なようだ。

「ごめん、藍花、遅くなったー」

笑って私の腕を引っ張ったまま、弥生はテーブルに寄っていく。入りたくない、私は眉を寄せてしかめっ面のまま弥生の後ろから顔を出した。

「あ、やーっと来た！　もうみんな食べちゃってまーす」

「座って座って！　ほらココ、俺のトナリ空いてるよー」

「こっちもねー」

示された席はどちらも端の席だった。右列の一番手前、もしくは左列の一番奥。弥生と離れる上に、必然的に隣が知らない男子になる席だ。

当たり前といえば当たり前なのかもしれない。純子も藍花も両隣を男子に囲まれる形で座っているし、これは『仲良くなる』ことが目的なのだし。

「咲、どっち座る？」

「……どっちでも」

むしろどうでもいい、そう思ったことは口に出さないでおく。どうして高校生が合コンなんてしているのだろう。大人の真似事なのか、そんなバカみたいなことはしなくてもいいのに。

「どーしよ、」

「あー、イイ。あたしが奥行く」

「ホント？」

「んー」

弥生の顔も他の人の顔も見ないようにし、奥の席へ向かおうとした。けれど何かに引っ掛かったような気がして足を止める。制服のスカートだ、椅子の背にでも引っ掛かったのだろうか。

どこに引っ掛けたのか確認しようと振り返り、そこでようやくそれが意図的なものだったことに気が付いた。白くなめらかそうな、男にしてはやけに細い指が視界に入った。

「ちょっと、放し――」

「なんでいんの？」

「あ、」

こんなことってあるのか、私はやけに冷静な気分だった。驚いた、というよりは始めからいるとわかっていて見つけたような感覚だった。

髪を結んでいない中島なんて、久し振りに見た。ずいぶん長くなっている。肩をほんの少し過ぎた黒髪は、女の子さながらに艶がありさらりと流れている。

「知り合い？」

誰かがそういった。中島はまっすぐ私を見ている。いつもと雰囲

気が違う気がした。髪の毛のせいなのだろうか。
それから、中島の隣に座っている藍花と目が合った。彼女の席と中島の席は他の人たちと比べると近い、その隣の男子は少しだけ離されているようだ。

「なんで？」

「知らない」

「知らなくはないだろ」

「……ご飯食べに来た」

中島が下を向いてため息をつく。ため息をつきたいのは私の方だ、そう思って視線を落とした。放課後に、こんな風にして中島に会うのは初めてかもしれない。

「ま、いいじゃん！　咲も座って座って！」

「あー、うん」

藍花に半ば睨まれながらそういわれ、私は形だけの返事をした。けれど動けない。

「中島？」

呼びかける、確かに聞こえているはずだ。だが中島は微動だにせず、下を向いたまま返事もしない。

「中島、手、放せ」

もう一度、中島に呼びかける。反応がない、そう思ったら急に立ち上がった。背が高いせいなのか、いきなり私の目の前は暗くなった。それから中島は席に座っている人へ顔を向ける。

「席替えしましょ！　でもアタシ、咲の隣じゃなきゃ帰るわ」

私からは表情が読み取れないが、おそらく笑っているのだろう、と思った。

「えー、なんだよ祥吾（ショウゴ）。いきなり独り占めする気ー？」

「うるさいわよ、ヒロ」

中島の体のせいで何も見えなくなった私は、座っている人たちがどんな反応をしているのか気になって顔だけを覗かせた。

「ちょ、祥吾こわーい！　笑って笑って」

そういって苦笑いを浮かべている、彼がヒロなのだろう。それから気になって、藍花へ視線を向けた。口がだらしなく半開きに開いている。おそらく中島は、今の今まであの言葉遣いを使っていなかったのだろう。純子も見てみるが、彼女も驚いているようだ。

他の男子が驚いていないところを見ると、高校ではいつもこうなのだろう。やはり中島も、女子の前では男っぽく見せたいのだろうか。私には普段の口調と一般的な男の口調を使い分けている、その意味が理解できない。

中島にとっては何か意味のあることだとは思うが、改めて聞いた

こともない。気がついたら、中島は中島だったから。

「じゃ、席替えねー。女の子は今のままでいいわよね？　男は適当に座んなさい。咲の隣以外でね」

そういって、中島はさっさと私を引っ張って一番奥にあった席に座らせた。それからその隣に座っていた男子を無理矢理に立たせて、腰を下ろす。気の毒に、そう思ったけれど、その男子が立たされたせいなのか、すぐに他の二人も腰を上げた。

「っし、じゃあ男は席決めな」

「祥吾ずるいー」

「うるさいわよ、リク。キサキちゃんの隣に座ろうなんて百年早いわ」

「何、どーゆー関係なワケ？」

「ほれ、ちゃっちゃと決めっぞ」

ヒロがそういって、三人で輪を作ると何やら話し合いを始めたようだった。それもすぐに席は決まったようで、三人は改めて決まった席に座った。しばらく隣同士で会話がなされた後、藍花の目の前に座っていたヒロが咳払いをした。

「いよし、じゃあ改めて自己紹介でもしますか！　えっと、じゃあ、隣の君から、時計回りね！　どうぞー」

そういって振られたのは弥生だ。

「あ、えっと、西川弥生です。今日は部活、バレーで遅くなりました。遅刻しちゃったけど、仲良くしてくださいね？」

口元だけで笑みを作る、彼女の性格がよく表れたようなさらりとした、快活な表情だ。

「本庄滉（ホンジョウリク）でーす。さっきっから祥吾に取られっぱなしでかわいそうな俺ですが、よろしくー」

そういったのはさっき中島が席から強制的に立たせた男だ。席を取られた、その前は藍花のことだろう。確かにかわいそうな人かもしれない。

「真島藍花（マシマアイカ）、です。知ってる人の方が多いから改めていうことないんだけど、みんな今日は来てくれてありがとーございますっ。楽しくご飯食べましょー」

半分聞き流しながら、やっぱり主催者はこいつだったかと内心で舌打ちした。まだ少し、中島の変化に戸惑っているらしく、ちらちらと視線が流れてくる。

当の中島はといえば、気付いているだろうに完全に無視している。顔にはニコニコと胡散臭い笑みを浮かべて。だからタチが悪い。

「中島祥吾でーす！　よろしくねー」

そういいながら、にこりと首を傾げる中島。始めとは打って変わってかなりのハイテンションだ。ついていけない、ため息をつきたくなった。そんな私の心情を知ってか知らずか、右隣に座っている中島が思い切り抱きついて体重をかけてきた。私は堪えきれずにわ

ずかに左に傾いてしまう。

「んでー、この子は八巻咲（ヤマキサキ）、キサキちゃんって呼んでねー！」

「……暑苦しい」

私はぼそっとそれだけいって、自己紹介は終わった。中島のテンションなど気にするだけ無駄なのだ、わかっている。

少し痛いくらいにぎゅうぎゅうと抱き締められる、言葉もまともに吐き出せない、その状況に少しだけうんざりする。

知らない男に話しかけられるよりかは何倍もマシかな、と自分を無理矢理納得させるが、それはそれで虚しいものがあった。

「あ、俺は中村彰太（ナカムラショウタ）。祥吾と名前似てるけど、間違えないでねー」

「えと、御沢純子（ミサワジュンコ）です。よろしく……？」

「でー、俺、星野宏之（ホシノヒロユキ）です！　ヒロって呼んでねー。俺今フリーだし彼女ほしーけど、今日は楽しく飯食って友達になれたらいいなーって思ってんで、仲良くしてねー」

自己紹介が終わり、意味もなくみんなが盛り上がる。中島ももちろんだ。私ひとりが雰囲気についていけず、冷めた目でテーブルを見つめた。

「で、すっごい気になってんだけどさ、祥吾と……キサキちゃんだっけ？　どういう関係なの？」

私とは反対側の席に座っている、リクという男子がテーブルから身を乗り出してそう訊いてきた。お冷やを飲んでいた中島の口元が

かすかに上がる。

「アタシとキサキちゃんはー、とーっても仲良しなのー！　もう、その辺のバカップルよりラブラブよー」

「え、うっそ！　付き合ってんの？」

「違う、ただ、家が隣なだけ」

「んもう、また怖い顔するー」

誰がさせてるんだ、そう思ったけれど相手にするのは面倒で口を閉じた。そこを狙ってか、弥生が口を開く。

「ね、すっごい聞きたかったんだけどさ、毎朝咲のお化粧してるの中島くんって、ホント？」

弥生はそういって私ではなく、中島のことを不思議そうに見つめる。それを聞いて他の二人の女子も驚いたのか中島を見た。

それとは反対に、男子は何故かニヤリと笑い、私を見る。気味が悪い。

「ホントよー。前に、一回キサキちゃんに怒られたことあったでしょー？　弥生ちゃんに笑われたって！　あれ以来薄目にしかしてないけど、いつもアタシがやってあげてるのよ」

にこりと首を傾げ、笑った。それから中島は女子から質問の的になっていた。どうして化粧なんてするのか、化粧品は何を使っているのか、そういった女の子にしかついていけないような話で盛り上がっている。

私がいつも聞かれて、答えられない類いの質問だ。なるほど、藍花は私がずっと秘密にしていると怒っていたが、これで誤解も解けるだろう。助かった。その話の中に時たまヒロとリクが入っていき、その度に小さな笑いが起きる。

私は当然話に入る気などなかったし、部活の後でお腹が空いていたので、盛り上がっている奴らを無視して割り箸を割り、手を合わせた。

「いただきます」

そういうと、目の前から笑い声がした。なんだろう、思って顔を上げると、中村彰太が私から顔を背けて笑っている。それは見た限り、私自身を笑っているようで、あまり気分の良いものではなく、睨みつけた。

「何がおかしいんですか？」

「イヤ、ごめん」

それからしばらく笑った後、中村彰太はにこりと、どこか気の抜けそうな、とてもやわらかい表情で笑いかけてきた。

「キサキちゃん、ね。よく祥吾から話聞くよ」

そういわれて、私は眉を寄せた。一体どんな話をしているのだろうか、人から自分の話を聞くのは、あまり好きではない。

人から人へ、何かを伝えることが信用できない。その人の主観と嘘が、いつしか大きな、偏屈な噂になる。私はそれを嫌っている。

これは理屈ではなく、私が今まで経験してきた事実に基づくもの

だ。

「思ってた通りの子だった」

「……どういう意味ですか？」

「ね、敬語やめない？　タメでしょ、俺等」

私はため息をひとつ、それから目の前の男を睨むように見た。
話したくない、直感的にそう感じる。
噂や人づてに聞くことよりも何よりも、私は自分の感覚を一番信用している。

「人数合わせで来たんで、仲良くするつもりはないです。名前も覚えていただかなくて結構です」

ほとんど無表情のままそれだけいい、皿に取り分けられていたお好み焼きをつつく。
おそらく、私と弥生が来る前に先に焼いていたモノの残りだろう。

「冷たいね、警戒心が強いのかな？」

「分析だけならどうぞご勝手に」

それだけいい、私は形だけの笑みを浮かべた。それからすぐに視線を皿へ戻し、食べ始める。ソースが程よく甘く、味は良かった。
残念なことに熱々ではなかったけれど。

「心配しなくても、祥吾のお気に入りを落とす気なんかないよ。でも、」

そこで中村彰太は言葉を止めた。お気に入りか、それは違うだろうなと思う。中島はわざと、そうみえるように振る舞っているのだ。誰も近づかないように、興味も持たないように。

実際どうなのか、なんて、友達以外のなんでもない。もしくは兄妹、のようなものだろう。あくまで私の憶測で、中島がどう考えているかなんてはっきりと聞いたことはない。別に、そんなことは必要ないだろうと思う。

あまりにも長く言葉を止められ、気になって顔を上げた。おそらく睨んでいただろう。けれど中村彰太はまったくその表情を変えなかった。

「……な、にか？」

寒気がした。堪えきれず発した言葉がわずかにふるえた。中村は気付かなかっただろう。

中村彰太はその表情のまま、元々垂れ気味だった目をさらに深め、やわらかく笑いながら口角を上げる。笑窪が深くなる。効果音をつけるならへにゃりと、笑った。

「友達になりたいなって、思って」

それは他の人から見たら人好きする、やさしくて親しみやすい表情だったろう。けれど私はすぐに視線を逸らした。

私の直感は相変わらず関わり合うなと告げているが、この場合は直感に従えば従うほど、私が悪者になるのだろう。私には正当な理由などないのだから。

「……勝手にすれば？」

視線を落とし、冷めたお好み焼きを呑み込む。何かが怖い。ふと隣の中島の皿が目に入った。なぜかいくつかの海老だけが皿に残っている。大丈夫だ、いつも通りだから。

未だ話に夢中な中島の皿からひょいと海老をつまみ、口の中に放り込んだ。それからひとつ箸で掴み

「中島」と声をかける。

「はーい！　なぁに、キサキちゃ――うげっ！」

「あんたその年になって好き嫌いとか笑えない。食え」

中島が気付かない、反応できないうちに、無理やり海老をつまんだ箸をその口の中へ突っ込んだ。口内へ入れてしまえば後は呑み込むしかない。

「うわ！　キサキちゃんすげ！　祥吾がエビ食ってるー」

ヒロが感心したように目を見開き、口を開く。その隣で弥生が呆れたような表情を浮かべていた。

「なんか、あーんってしてるはずなのに……」

「咲にはムードなんて期待しちゃいけないよ、藍花」

「あ？　悪かったね。中島？　男だろ、出すなよ」

何を考えているのかと思えば、バカらしい。私は思わず鼻で笑っ

た。それから残りの海老を自分で食べてしまう。一匹くらい食えるだろう、と暗に訴えた。

「おっとこ前だな、キサキちゃんは」

一瞬だ、体が固まった。視線だけで中村彰太を確認する。笑ってやがる、クソ。内心で毒づいた。

中島は口に含んだそれをよっぽど感じたくないのか、あごすらも未だ動いていない。しょうがない、いつもの通り鼻をつまみ、呼吸すらも制限する。

「そらどうも」

やはり睨むようにしながら、感情なんてこもっていない礼を並べた。その隣ではずっと静かにしていた純子が、何故か今はキラキラと目を輝かせていた。

「咲ちゃんはいっつもそぅだよね。カワイイよりキレイで、カッコイイの！　女の子にももてるしー」

そういう純子をあたしは呆れた目をして見た。それとこれと、今の状況にどう関係しているというのか。さっきまで静かにしていたくせに、今はうっとりと視線を絡めてくる。一瞬イヤな考えが頭をよぎったが、それは考えないことにした。

「ぅえっ！　マジ？　んじゃさ、レズとか同性からの告白とかあんの？」

「女子校の神秘だねー」

「んふ、なんか想像できんっ」

「あるよねー、咲とか絶対に告白されてるよ。あたし一回、咲の下駄箱に手紙入れる娘見たことある」

どこか呆れたような、冷めた口調で弥生がいう。そんな光景、私だって見たことがある。他の二人にだって心当たりがあるはずだ。

そんなことが起きるのは、何も下駄箱だけじゃない。他の誰もそれを口には出さないが、藍花も純子だって一度くらいは女同士の告白現場を見たり、その手の話題を話したりしたことがあるはずだ。

たとえばバスケ部のキャプテンで背の高い三年の先輩とか、頭がいいと噂の二年の生徒会長とか、茶道部の着物がよく似合う、まさに和風美人という言葉がぴったりの部長とか、そういった校内の有名人の下駄箱にかわいらしい封筒を置いていく女子生徒を見かける機会なんて、それなりにある。

まだ入学してから三ヶ月しか経っていないのに、という事実は忘れたことにしよう。そういえば今日も、一通もらった気がする。これで、六人目か。

「どうでもイイ。あんなの恋愛じゃねーし、ファンレターみたいなもんだろ。それより中島、息止め記録更新するのはかまわねーけど、さっさと食わないと死ぬんじゃない？」

「うぅー、」

中島は今にも口の中にあるものを吹き出してしまいそうだが、私がきっちり手で塞いだおかげでそんなことはできない。中島は涙目で嫌悪を私に訴えてくるが、そんな甘えが私に効くはずもなく、苦しさに負けてそのうちにあっさりと海老を噛み砕き始めた。

「はじめっから食えばいいのに」

気を取り直して手を離し、自分の分のお好み焼きを箸でほぐして口へ運ぶ。そこでようやく中島は海老を飲み込んだらしかった。不快そうにしわの寄った眉間、ごくりと合わせて動く喉が男のそれを感じさせた。

中島は一息ついてコップに手を伸ばし、お冷を飲んだ。それから今まで止めていた分の空気を吐き、不満を吐き出すかのように口を開いた。

「だってー、あんなの食べ物じゃないわよ！　もー、ホント、なんでキサキちゃんいるのよー」

しかも海老があるときに限って、小さな声でそういったが、席に座っている全員の耳にきちんと届いていた。乾いた小さな笑い声がぱらぱらと聞こえてくる。

中島には、嫌いなものが多い。生の魚は絶対に食べないし、多分、魚介類はほぼ全滅だ。あとはトマト、セロリ、レタス、人参、じゃが芋など、挙げればキリがない。ピーマンなんてもっての他だし、こんにゃくにちくわ、梅干し、キノコ類だって嫌いだったはずだ。毎日の食事に中島の好き嫌いをまともに反映していたら、確実に死期を早めるだろう。

「るさいな、好きで来たんじゃねーっていってんだろ、」

「もー、ホントダメ！　次は絶対来ちゃダメ！　っていうか遅くなるときはアタシに連絡するって約束したじゃない！　しかも男！　男がいるのよ、キサキちゃんっ狼よ、狼なのよっ」

「話ずれてるし……イミワカンネ」

だんだんと血走ってくる中島の目はそれだけで恐怖だ。加えてガクガクと人の体を揺さぶり、その結果自らも頭を振ったり体を揺らしたりしてしまうので、さらさらの黒い髪の毛が着実に乱れていく。

その形相は、口調だけではなく見た目もしっかり『ヤバい人』だと思う。

放っておけばいい、そう思いつつも、普通にしていても目立つ口調と中島の体がでかいこと、大袈裟なリアクションに大きい声のせいで、近くの客や通り過ぎる店員が中島に対して怯えている、もしくは不審がっている様子が手に取るようにわかってしまう。これは私がどうにかして中島を落ち着かせるべきなのだろうか、と考えてみる。この男が落ち着いてくれないと、私も目立ってしまうのだ。確実に悪い意味で。

「わかってるの？」

ぴたりと動きを止めた中島は、むっとした表情を私の目の前に見せ、わざとらしい上目使いをしてみせる。そんな中島を少しばかり乱れた意識で見ながら、やっぱり髪を結んでいない中島はおかしい、と思った。やることも口を開けば出る言葉も変わっていないはずなのに、感じる違和感が拭えないのだ。

「へーい」

うるさいな、あえてそれは口に出さず、適当に返事を返した。それを見て中島は「もぉ……」とため息のような息を吐き出す。乱れた黒髪がおかしい。直してやろうかと髪に触れようとして、止めた。

どうして、伸ばしているのだろう。中島が髪を伸ばすと決めたのは、多分、あのときからだ。確証なんてないけれど、私のせいなのだと思う。あのとき私が決めたように、中島もきっと何かを決意して、そうして今があるのだろう。

あのときも今も、中島は肝心なことは絶対にいわないし聞かない。それは多分、私も同じだ。

「あ、中島くん？」

「なぁに、弥生ちゃん」

「あの、今日のはね、私が騙して連れてきたんだ。だから、咲、悪くないの。ごめんね？」

弥生がそういって私のフォローをした。それをどこか他人事のように聞き流す。

でも、そんなことはどうだっていい。弁解なんてするだけ無駄だし、中島だって本気じゃない。

そんなことよりも、中村彰太から逃れられて私はほっとしているのだ。

「あら、気にしないでー。どうせキサキちゃん、そんな約束なんて覚えてても守らないもの。ねー？」

「……わかってんじゃん」

「えー、何その会話！　やっぱ付き合ってんじゃないのー？」

ヒロがそういって身を乗り出してくる。この人はやっぱり中島の友達だ、妙な所で納得しつつ、相手にする気も起きなかったのでお

好み焼きを口へ運んだ。もうすぐなくなってしまうなぁとぼんやり思う。お腹空いた、やっぱり部活の後は疲れる。早く帰りたい、どうにかできないだろうか。

「あっれー、キサキちゃーん？　無視ぃ？」

最後の一切れを口の中へ運び、そのまま割り箸を咥えた。物足りない、まったく満たされていない。少しは胃も落ち着いたようだけれど、もう丸一枚、いや二枚は食べられそうだ。

「ヒロくん、咲はあれ、お腹空いてるんだと思うよ」

「キッサキちゃーん、お箸銜えるとか、お行儀悪くなーい？」

「そっかー、部活の後だもんねー。んじゃ、なんか頼みますかー！　俺もち入ってんの食いたいなー」

確かに、これは行儀が悪いか。中島に指摘され割り箸を置いた。物足りないなぁと思いながら頼むつもりでいるのか、メニュー表を持っているリクを見た。するとそのメニュー表の先をヒロが掴んで上から覗き込んでいる。

「やだーリク、ここは牛すじっしょ！　うしーうしー！」

「えー、もちだよー！　もちもちっ」

そこでリクとヒロの餅か牛かという睨み合いが始まった。どちらも頼む、という選択肢は二人の中にないのだろうか。やっぱり中島の友達だ、と納得する。

「っるせーてめぇら。ここは女の子に選ばせんのが常識だろーが！　メニュー表渡しやがれっ」

中島が睨み、低い声で唸った。こんなくだらない争いにそこまで怒らなくても、と思いつつも中島が相当怖かったのだろう、なぜか青ざめているヒロとリクの顔をじっと観察する。そんな三人の様子を見ながら、藍花と弥生と純子は顔をほんのり赤くさせて笑っている。

中島は固まってしまった二人の手からメニュー表を奪うと、ふんと鼻を鳴らした。

「ま、祥吾のいう通りだね。キサキちゃん、何食べたい？」

「うあっ、彰太！」

中島が盗ったメニュー表をさらに中村彰太が奪い、ぱっとあたしの顔の前に差し出した。一番目についたものをとりあえず口にする。

「……エビ？」

なるほどね、ここのお店のオススメは海老なのか。初対面同士で始めに頼むものとしては無難だろう。

「キサキちゃん、それはイヤミかしら？」

「ダイジョーブ、おいしいよ？」

「あたしおもちがいいなー、藍花は？」

「うーん、なんでもいいよ？　そんなにお腹空いてないし。純子は

どうする？」

「あ、えと、なんでも……私もお腹空いてないから、」

「じゃー、エビ嫌いな中島くんは？」

「もう、弥生ちゃんまでっ！」

笑い声がどこか遠い。スクリーンの向こう側のように、そこに馴染めない自分。確かにこの喉から出る私の声までも、どこか遠いのはどうしてなのか。

どうしたらいいかわからなくなったから、なかったことにした。いなかったことにした、全部。自分を映すものが嫌いになって、それと同時に髪を切った自分に対して妙ないとしさを感じるようになった。

中村彰太の目が、嫌いだ。

＊＊＊

メイク　＊　03

適当に頼み、結局七、八枚のお好み焼きやらもんじゃ焼きやらを八人で平らげた。それに加えてデザートを頼んだりもして、気がつくと時刻は九時。そろそろ帰ろうかという雰囲気になった。

「あ、アドレス！　弥生ちゃん、交換しよーっ」

ヒロのその一言で、アドレス交換が始まった。ただそれが私に向くと、中島が前に出てきてことごとく断る。交換した所で連絡を取るとも思えないが、隠すと隠した分だけ気になるのが人間というもので、ヒロとリクのブーイングはうるさかった。

「もう、一人占めズリィよ！　イイじゃん、メールくらい」

「過保護だよ、祥吾は」

「ねー、中島くん！　中島くんのアドレス教えてよー」

「あ、あたしも知りたい」

「つーかもしかして女の子一人占め？」

「くそー、こんなのただのカマ野郎だよ、藍花ちゃん！　俺にしようよー」

「やぁだ。てかさっきリクくんとは交換したし」

「あら、じゃあ後でリク、かキサキちゃんに聞いてねーん。弥生ち

ゃんも、それでイイかしら？」

「うん、咲よろしくー」

「……あぁ、」

よくやるな、友達になったらきっと楽しいだろう。

ぼんやりとその光景を見ていた。そこに広がる会話も、中島がいる限り私には関係のない話だ、そう思っていたからだ。

テーブルに左手を置き、右手で頬杖をつく。手だけがテーブルの上から姿を消して誰にも見えない。それを急に掴まれ、その人と視線を合わせた。

口を開く前に手のひらに何かを押し込まれ、私の手ごと、相手の手が包んだ。押し込まれたものを握らされる。

あとで、中村彰太の唇がそう動いた気がした。それからまた深く笑い、手を離した。その手にあるものを、私は返すことも捨てることもできた。それなのに気がついたら私はただ握りしめて、わからないようにスカートのポケットに押し込んでいた。見なくてもそれが何かはわかっていた。メールアドレスだ。

「じゃ、解散！　高校生は十時までにお家に帰りましょー！　てね」

ヒロがそういって、私たちは店を出た。

夜の空気は、七月とはいえ少し冷たい。代金は高校生らしく割り勘で、藍花が払っておいてくれた。それから私と中島と弥生と中村彰太にリクで、同じ電車へ乗り込むことになった。ヒロは地元、藍花と純子は逆方向だった。

ホームに降りればタイミングよく電車が来て、すぐに二人とも別れる。
車内の空気はクーラーがよく効いていて鳥肌がたちそうになった。

「弥生ちゃんって駅どこー？」

リクが車内での位置を確保すると、弥生に話しかけた。
車内の座席は全部埋まっていて、私と中島は入ってすぐのドアに寄り掛かるようにして立っていた。リクは私たちからは奥の通路に立ち、弥生が近くに立つ。中村彰太はそのちょうど真ん中の位置に立っていた。

「中島くんと咲と同じトコだよ」

「あれ、もしかして三人とも中学一緒だったり？」

「ううん、あたしだけ別。リクくん達は駅どこ？」

「俺と彰太は弥生ちゃん達より三駅先」

「あ、じゃあ高校は地元ってヤツ？」

「そ、俺らも中学違うんだけどさ、家は意外と近くてー？　そんで仲良くなったんだよねー」

「仲？　よかったっけ」

「ひどー！　彰太のバーカ！　もう一緒に帰ってやんねぇ！」

「ハイハイ」

「あはは」

流れる景色は暗闇にまぎれてわからない。窓に映る明るい車内の景色が遠くの、別の世界のようでおかしな気分になった。時折り過ぎる車のヘッドライトが目に痛い。

「キサキちゃん、疲れてる?」

中島が私の顔を覗くように首を傾げた。少しだけ目を合わせ、また窓の外に視線をずらす。

「別に、」

頭がちかちかしているような気がした。きっと目の奥の方を刺激されてる。

光は意地が悪いと思う。

肝心なときにはいつもなくて、そのくせ突然現れてちかちかちかちかと突き刺してくる。光がなければ闇はない、なんてバカな台詞をときどき聞く。そんなのは間違ってると、思うことがある。

最初に闇があった、いや、何もなかったのだろう。それはただそこにあったのだ。名前はいらなかった、それがすべてだったから。

光はいろんなものを侵食している、ときどき思う。

駅に着くまで、私はただ外を眺めていた。相変わらず話し声は遠かった。

駅に着き、別れの挨拶を交わす。リクと中村彰太が手を振ったのに対し、弥生も楽しそうに手を振り返す。中島も笑って、ドアが閉まった。

私はただじっと手を振る中島と弥生を見ていたが、ドアが閉まってから妙に強い視線を感じて車内へ視線を移した。その先に中村彰太がいて、にっと唇の端をつり上げる。睨み返して、それでも何かがおかしいように感じた。電車が動き出す。中村彰太じゃなかった、そう思ったけれどどうにもその強い視線は中村彰太から来ているような気がして、目を離せずにいた。

「――っ！」

偶然か、どこかで見ていたのか。

そこにいたのだ、彼女が。電車がわずかに動き、視点がずれて気付く。中村彰太のちょうど後ろだった、毎朝目が合う、パーマのかかった長い黒髪をしている彼女がいた。そうして私が彼女に気付いたことがわかると、にっこりと笑顔を見せた。

もっと違う状況で出会っていたら、おそらくカワイイと思えただろう。人懐っこい、無邪気な雰囲気がそこにはあった。

ただそのときは、恐怖心が先立って心ごと動けなくなった。

「キサキちゃん？」

「咲、どうかした？」

異変に気づいた中島が視線を寄こす、それに呼応してか弥生も私を見ていた。

冷たいナイフが目の前に突きつけられたような気分だった。カバンが肩から落ちそうになって、はっとしてかけ直す。

「なんでも、ない。ちょっと」

怖い、というのか、これは。

少し違う気がしたが、気のせいだと考え直す。きっと偶然乗り合わせて、それが毎朝同じ電車に乗る私だとわかって、それで愛想笑いをされたのだと自分で自分を説得する。

ストーカーみたいだといった弥生の言葉で、自分は少し過敏になっているのだと思った。よくあることだ、そう思った。

「早く、帰ろ。弥生、暗いけど平気？　家まで行こうか？」

「いいよ、自転車だし」

「そ？　じゃあ自転車置き場まで行く。いいだろ？　中島」

「当ったり前じゃなーい！　女の子一人で夜道帰すほど冷たくないわよ！」

「はは、ありがと」

適当に会話をしながら、改札を抜ける。ほとんどは弥生と中島の会話で、どうやらヒロについての話題らしかった。

自転車置き場まで付いていくと、案の定そこには電柱に付いた古い電灯の灯りしかなくて、湿った生ぬるい空気が肌をなでると、薄気味悪さも一層強くなった。

また明日、それだけいって自転車を漕ぐ弥生の背中を見送る。そのうちに何もいわず中島が家へ向かう道へ足を向け、私もそれに続いた。帰りが一緒になるのは、ずいぶん久しぶりなんじゃないかと

思った。

会話らしい会話はそこにはなく、足音だけが夜道に残る。朝と違って、私は中島の隣ではなく少し後ろを歩いていた。白いシャツがぼんやりと明かりを集めているように思えた。

「中島」

そっと中島のシャツの裾をつかんだ。

なんとなく、だ。理由なんてない。口が動いたのが先か、右手が動いたのが先か、それはわからない。

ただ中島は首を動かして、やさしく笑ってくれたのは確かだった。

「ん？　なぁに、キサキちゃん」

「……なんでも、ない」

「そ？」

急に、叫びたくなった。

声が枯れるまで、涙が尽きるまで泣き叫びたい衝動がどこからかわき上がってきて、どうしようもないような気分になった。

中島は静かに視線を前に戻した。それから少し歩くペースを落として、私の右隣を歩いてくれる。

「夏休みね、もうすぐ。キサキちゃんは部活かしら？」

「たぶん、そう」

「そう。頑張ってね」

「中島は？」

「ん？」

「バレー……もう、やんねぇの？」

中島はやさしく笑った顔を見せて、背中から回した左手で私の頭を軽く叩いた。なでるわけじゃない、触れるともいいがたい、軽い接触。

喉まで出かかっていた本当に聞きたかったことが、底の見えない海まで沈んでいく。

「今年はね、修行に行くの。お勉強してくるわ」

「げ、あの金髪？」

「今は黒よー！　そういえばリョーちん、キサキちゃんのことも呼んでたわね。一緒に行く？」

「ぜってー行かねぇ」

「ま、つれないわねぇ」

「てかあたしに何の用が」

「もちろん！　実験台に決まってるじゃなーい。キサキちゃんの肌って化粧ノリいいし、髪もいじってないから綺麗でしょう？　ただでカットもしてくれるっていってたわよ？」

「勝手にやっとけ。カマ二人も相手にする気ない」

「ひどーい！　もう、そんなかわいい顔して口が悪いんだから詐欺よね！　女の敵？　男の敵？　ていうか口が悪いのがまた飾ってない感じで好かれちゃうんでしょう、どうせ！　なんかくやしーわ」

中島は口を尖らせて何か悪態をつこうとしているが、褒めているのか貶しているのかはいまいちわからなかった。そういっている表情も、いいたいことを全部いったその後には笑顔を浮かべているのだから、おかしな男だと思う。

中島にとって、私と共有してきた時間はかなり多いと思う。家族よりも多いかもしれない。それくらい隣にいることが当たり前だったのだ。

高校入学をきっかけに離れて、ふとその事実に気がついた。それからようやくわかったのだ、中島は私の前では絶対に笑っている。

私は、中島が嫌いだった。

実際にそういったこともある。それなのに思い出す中島の表情は全部、笑っていた。怒りを感じたり涙を流すことだってあったはずだ。確かにそういう場面もあったように思う。だがそれが私に向いたことは、一度だってなかった。

たとえそういうことがあっても、今のようにふざけているようで本気が感じられない、からかうようなニュアンスが含まれたものしか私は知らない。

そこに違和感を感じるようになったのも、高校へ入学してからだ。

ときどき、中島は私を心底嫌っているんじゃないかと思うことがある。

シャツを掴んだ手に自然と力がこもった。

「……きたい、」

「え？　なぁに、聞こえなかったわ」

「夏休み、どっか、行きたい……」

今さらかもしれない、そんなことを考えるのは。本当ならもっと前に気づいておくべき事実だった。

ただあの頃は、そんな可能性は絶対にないとどこかで確信していたのだ。

ピーターパンを信じた子供のように。

「わかったわ。どこか、連れていってあげる……ところでキサキちゃん？」

「ん？」

「それって、二人っきりかしら？」

「……まかせる」

私がそう答えると、中島はまた笑った。そうしてまたぽんぽんと、頭を叩いた。

＊＊＊

コール　＊　01

俺が最初に目にしたのは多分、光じゃなかったんだ。

「お疲れでーす」

「おー、お疲れぇ」

家に帰ることが、悪いことのように思えてならない。叔父さんも叔母さんもよくしてくれる。やさしくてやさしくて、ときどきその目が痛い。

やさしさは光に似ていると思う。その中には多分、愛情だとかとにかく慈しむようなものが溢れるほどにつまっていて、それを向けてもらえることはこれ以上ない幸せなんだ。

だけど、俺が一番最初に目にしたのは光じゃなかったんだ。だから、痛くなる。胸の奥の方がぎゅっと、喉を締め付けて離さない。心はどこにあるんだろう。

もしかしたらあの日、死んでしまったのかもしれない。

「よ、家出少年」

家に居づらくなった俺は、高校に入ってすぐに始めた駅前のファーストフード店のバイトでギリギリの時間まで働くことにした。

夜の十時、バイトに入るのは六時からで、それまでの時間やバイトのない日は友達と遊んだり、一日や短期のバイトをしてみたり、図書室で勉強したり、たまにそこにある蔵書をあさって読むふけったり、とにかく家にいる時間を一秒でも減らしたかった。休日は朝から晩まで粘って、確実に週三で入ってる。

「家出なんてしてないだろ、人聞き悪い」

「いーや、お前のは家出だね」

バイトが終わって、事務所に下がる。俺がバイトしてる店は二階建てになっていて、事務所は二階の奥の扉の向こう側にひっそりとあった。ドアを開けると、今日は店にいないはずの男がいて少しだけ驚く。

「何やってんだよ、彰太」

俺が不審に思ってそう訊ねると、彰太は「べっつにー」といって目を逸らした。そしてそのまま会話に戻っていく。

とても広いとはいえない事務所、奥の部屋では社員の人がカタカタとパソコンに向かい仕事をしていた。

低い丸い形をしたガラステーブルの周りに、おそらくこれから店に入るんだろう、ユニフォームを着た男子大学生と年齢不詳の男、それに制服姿の彰太が座っていた。

会話はなかなか盛り上がっているらしい。誰か、多分大学生とフリーターの男二人で吸っていたのだろう、使い古されて焼き痕だとか灰がこびり付いたシルバーの灰皿には、山のように吸殻が積み上げられていた。

「あー、八巻来たんだったらそろそろ行くかなぁ。山さん、行きましょー」

「……あと一本、」

「あ、じゃあ俺も」

そういってどこからか煙草を取り出し、銜える。カチ、火がついた。すぐに紫煙が揺らぐ。室内の空気はこもって白くなっていた。

俺は特にいうこともなく、とりあえず着替えようと思ってフィッティングルームに向かう。楽しそうにしゃべる大学生の声だけがやけに大きく聞こえてきた。

簡単に着替えを済ませ、フロアに戻った。そこには既に二人の姿はなく、彰太が何かの歌を口ずさんでいた。

青リンゴの匂いがするワックスでふわふわと空気を含ませた彰太の髪は、見た目を裏切らずにやわらかい。どうせならワックスなんてつけないでいた方がずっといいと思うけれど、そうでもしないと髪の毛が細い彰太は髪が薄く見えるらしい。気の毒なもんだ。

何もいわずに彰太の向かい側に腰を下ろした。焼ける煙草の匂いがした。

「なあ」

「なんだよ」

「……会ったよ、さっき」

彰太はテーブルの上をじっと見つめている。その先はおそらく、灰皿だ。沈んでいるのかと表情を窺うが、何かを考え込んでいるようにも見えて、とりあえず話の先を促すことにした。

「誰に？」

俺がそういうと、彰太は目を合わせてきた。逆に俺を窺うような視線、それはじっと睨みつけているようにも見えた。

そして彰太ははっきりといった。

「八巻」

「は？」

いったい何をいい出すんだと間抜けな声が出た。八巻は俺のことだったからだ。会ってるのは当り前じゃないか。頭でもおかしくなったのかといいそうになったが、彰太の口の方が先に動いた。

「八巻咲、会ったよ」

久しぶりに、他人の口からその名前を聞いたと思った。心臓が跳ねる、視線が逸らせない。気がついたら右手が拳を作っていて、じわりと手の平が湿っていくような気がした。

「……は？」

本当に間抜けなことに、俺はそういうことしかできなかった。言葉と言葉で思考がぐちゃぐちゃになって、先へ進めない。形を作らない。

彰太はテーブルに右肘をつき、手の甲に顎をのせる。そうして少しだけ俺の方に身を乗り出して、じっと視線を寄こして逸らさなかった。

「すげー似てんのな。一瞬、お前が来たのかと思った」

「ちょ……待って、なんでっ」

どこで会ったんだ、聞こうとして喉が引きつった。唇がうまく動かない。もどかしすぎてどうにかなりそうな気がした。

彰太はそんな俺の反応を見て、少しだけ驚いたように目を見開いたが、それもすぐに元に戻る。

「なんか、合コン？　それに来てて……つーかお前がいってた幼馴染みって祥吾のことだろ？　俺、今クラス一緒」

彰太は何を考えているかよくわからない表情を浮かべる。怒っているのか、感心しているのか、彰太は俺の顔を見るとため息をついた。

「お前、いつまで逃げてんの？」

言葉を失う、わからなくなった。逃げといった彰太の声が、頭のどこか深いところで何度も何度も響く。

「……咲は」

もう昔みたいには戻れないんだ。それでも名前を呼んだら、それだけで胸がいっぱいになった。

「咲、には、祥吾がいる。それで、いいんだ。俺は……」

きっと、俺は咲を傷つける。咲もわかってる、離れることしか選べなかったんだ、二人で選んだんだ。

それでも電車でたった三駅のこの地にいる俺はとことんバカで、

アイツの言葉を借りるならお人好しってやつなのかもしれないし、都合がいいだけなのかもしれない。だけど俺の、俺達のために泣いてくれるようなヤツの頼みを聞かないほど、冷たい人間にはなりきれなかったってだけだ。

咲にはずっと会ってない、連絡もしてない、俺がどこにいるのかも咲は知らないんだ。ただ祥吾とは、月に一回のペースで会う。それも多分、咲は知らない。

連絡をしたらいつでも会える位置に、経済的な面、保護者がどうしても必要な立場のあのときの俺の年齢、それを考えたら結局こんな近い所しかいけなかった。

それでも高校は、今の家から一時間かけた遠い場所を選んだ。咲の学校は祥吾から聞いて、絶対に会うことはないだろう、といわれた。

本当は、もっと遠くへ行きたかった。偶然にだって会えないような地へ、誰も俺を知らない場所へ、それでもあの日を思い出すとどうしても、それをいい出せない自分がいた。

未だに俺は、いろんなことに怯えている。

「俺は、イヤなんだ。咲を見てると……壊したくなる」

咲のせいじゃないのに、俺がただ弱いだけなのに、愛してるのに、殺したくなる。目の前にするとどうしても嫌悪感と苛立ちと憎しみがわき上がって、自分が止められなくなりそうで。

「いっそ、壊しちゃえば？」

「……勝手なこというな」

俺はそういって彰太を睨みつけた。彰太はそんな俺の視線を一瞥すると、どこか呆れたような表情をした。

「なんかー、難しいな、お前らって」

そういってくしゃりと表情を崩す。それから俺と目を合わせて、気の抜ける笑顔をかました。

「お前もそうだけどさ、八巻咲も、一回も笑わなかった。ホント、そっくりだよ」

俺が最初に目にしたのは多分、光じゃなかったんだ。

「俺……笑ってなかった？」

彰太の言葉はまったく俺の知らなかったことをいった。笑ってないなんて、初めていわれた言葉だった。俺が半信半疑になって訊ねると、彰太は仕方ないなとでもいうように目を細めて、苦笑いを浮かべる。

「愛想笑いくらい覚えなさい」

咲に代われるものなんて、ここにはない。この世界も、きっとどの世界にも、咲以外にはないんだ。

俺が最初に目にしたのはきっと、咲だった。まだ名前もないそのときに、俺は咲を見た。きっと咲も、俺を見たんだ。光だって咲の代わりにはなれない。

たとえこの宇宙から光が消えても、俺達には残るものがある。形を映せなくても、触れれば輪郭はあるんだ。

俺は、笑えなくなったのか。
そう思うとおかしくて、はは、と音がこぼれた。涙が喉に落ちていくのを感じた。

＊＊＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9946c/

ミッシング

2010年10月10日07時46分発行